

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第12回)

Why ?

初めてイギリスへ行ったのはまだ学生の頃、ちょうど叔母一家がロンドンに住んでいたの、お世話になるつもりだったが、それならば、と祖母と一緒にいくことになった。航空券に「Mr. & Mrs. ODASHIMA」とあるのにちょっと照れながら、祖母と二人でヒースロー空港に到着。まだ慣れない英会話で、二人分の入国審査をなんとかこなす — つもりだった。「渡英目的は?」「観光です」「宿泊は?」「ロンドンの親戚の家で、住所は〇〇です」と型通りのやり取りが続き、次も想定通りの質問「滞在予定は何日間?」がきたので、用意していた英語で「私は1か月、祖母は2週間滞在する予定です」と答えると、審査官が言った — 「Why?」これは想定外だった。「え?」「どうして滞在期間が違うんだ?」「どうしてって、だってその予定だから…いや、その…」思わぬ質問にしどろもどろになってしまった。「Why?」に答えられるようにするのが英会話の秘訣らしい。

祖母の帰国後、さっそくイギリス内を一巡りする一人旅に出た。ノッティンガム郊外の炭鉱町イーストウッドへ行った時のこと。ここは小説家D.H. ロレンスの故郷で、彼の生家や父親が働いていた炭鉱の跡だけでなく、少し歩けば、彼が小説の中で描いた森の風景が広がっている。地図を頼りに散策を楽しんでいると、途中、乗馬服姿の女

性に馬上から声をかけられた。ロレンスには「馬で去った女」という短編小説があるので、それだけで感動してしまった。

と、浮かれているうちに道に迷ってしまった。帰りのバスの時間にも限りがあるので、明るいうちに帰れるか、かなり不安になってきた。が、ようやく犬を連れて老人に出会い、ホッとしたのも束の間、「すみません、道に迷っちゃって、イーストウッドに戻るにはどの道を行けば…?」という質問に答えてくれた老人の英語がさっぱりわからない。中部地方独特の訛りが強いのだ。とりあえず、指をさしてくれた方へ歩き出しながら「ありがとうございます」と言うと、「どうしてそっちへ行く? こっちだ」と別の方へ連れていく。指をさしていたのは「あっちへ行くと××という場所がある」とか何とか言っていたらしい。道の分かれ目ごとにそういう頓珍漢なやり取りを繰り返し、ようやく本当に「ここを真っすぐ行けばいい」と言ってくれたと思われる) 場所へ出た。改めて礼を言い、「写真撮らせてもらっていいですか?」と聞くと、老人が言った — 「Why?」頓珍漢なやり取りの思い出に、という本音を封印し、「あなたは私の命の恩人だから」と言うと、「そうか」と言って老人はおもむろに櫛を取り出し髪を撫でつけてポーズをとった。うん、通じたようだ。